

工場も酪農場も同じ 誰が作業に責任を持つかできる

NHKのプロフェッショナル仕事の流儀を見た。その中で工場再建人の〇〇氏が、徹底して工場内の無駄を省くと言っていた。工場内の人には何が無駄であるかが良く理解できないらしく、改善がなかなか難しい。それはいつもと同じ事をいつものように繰り返し、それが日常になっており、問題と感ずる感覚が麻痺しているからに他ならない。整理整頓が出来ていないことが日常になり、その結果時間がかかることが普通になる。これが工場の生産性を低下させる。ものの置き場所、部品の置き場所ひとつで生産性が異なる。

工場の生産性がアップしたら、余った人は新たな生産ライン構築し、新商品を開発する。決して人を減らさない。又流れ作業の生産工程をセル方式に改めている。グループでひとつの商品を完成させるのである。一人の人が多くの生産工程に関われるので、品質に責任を持ち、多くの工夫を各工程で発揮する。その結果、流れ作業よりも生産性が向上する。しかも従業員がその品質に責任を持つために、作業の質が向上する。自分が作ったものか、流れに任せたものかで、商品の品質が異なる結果である。

酪農場でも同じ事が言える。何年間も同じ事を繰り返し、それが日常普通の姿。その中にいる人には、その自分の姿が見えず、異常とは感じないのである。外部の人が見て初めておかしいと感ずる。

某県での搾乳立ち会いを行った。2名の従業員で8台のユニットを使用し、2名で8台を管理しながら搾乳をする。一見して問題がないように見えるが、過搾乳は多い、装着時の時間が乱れているはで、かなり問題があった。そこで、ミルクラインの口径、傾斜の事も考えて、2名が分かれて搾乳をするように提案した。1名は処理室側からスタート。もう1名は中間地点より奥の部分を担当。それぞれが自分の場所に責任を持ち、過搾乳がないように、装着のタイミングを気にするようにした。

その結果、搾乳時間が30分短縮し、体細胞数も減少したとの事。提案後に良い報告を頂いた。責任の所在が不明では、見ているようで見ていない、いい加減になる可能性が高い。工場も酪農場も同じ。誰が生産工程に責任を持つかで、牛乳の品質が異なる。

解決途中の工場の人々の笑顔に驚いた。従業員が考え、授業員が行動するのである。問題点は指摘されるも、どのように変えるかは、現場の人任せである。自分自身で考え行動する。そこには現場の人しか知らない工夫もある。一が出来るとおもしろいように、改善策が出てくる。従業員の笑顔がいい。工場が明るくなる。まさに仕事が楽しくてしょうがない状態になっている。

整理整頓前の状況 これでは機械で壊してしまう可能性が大きい。

右のように整理整頓
使いやすさも倍増する

